

森島映

MORISHIMA YOW

15

ア
サ
キ
ノ

0

MORISHIMA YOW 森島 映

レタス

マイルス・デイヴィスは

「take 0」という言い方で、曲が無い段階からレコーディングを開始して曲が出来ていく過程をレコードとして商品化するみたいな手法をとっていたんですね。僕はその手法をさらに推し進めてスタジオではなくライブでそれをやったらどうなるんだろうなって。そのイメージずっとあるんですよ。

Annie's Cafe (京都) に、こんな日を作ろうと、僕が「オープンマイク」ってやりだしたんです。飛び入りで誰でも参加できるんですよ。「オープンマイク」とか「飛び入りライブデー」ってやっているライブハウス結構あってね。その元祖は多分「拾得…じっとく」(京都にある老舗ライブハウス) だと思うんですけどね。僕、拾得で働いたことがあるんです。その昔「七転八倒無料ライブデー」というのがあったんです。ブックオフとかもしてないし、チャージもギャンブルもないの出演者が集まって来るんですよ。リハーサルもしないんだけど、本番はキチッとやるんです。僕はその自然発生的にやっている感じが面白いなと思って。当時大学生だったんですけど「僕もやらせて下さい」ってドラムの叩き語りとかやっていました。なんか新しい感じで張り合えないかなと思って。ドラマーだったんですよ。ドラムが叩きたくてバンドに入ったみたいなの。元々、音楽はずっとやっていました。

僕、愛媛県松山の鴨川中学校ってとこなんです。田舎っていうか牧歌的な水田地帯みたいなところで僕は洋楽しか聴いてなくて。一学年3クラス120人ぐらいで、洋楽聞いている人が4人ぐらいしかいないんですよ。やっぱりそういう連中が集まるじゃないですか。集まって「レッド・ツェッペリン」がどうしたとか「クイーン」がどうしたとかね。仲良くなってるバンド組もあって盛り上がるじゃない。中学2年生ぐらいの時の話ですよ。「俺達バンドやろうぜ」「俺達バンドだぜ！」って集まって喋っているだけなんやけど、俺達バンドだぜって熱い

んですよ、中学生。それでポーカー志望の奴は掃除の時間にホウキ振り回して「フレディ・マーキュリー」になりきっている。ギターは朝から晩までギターばかり弾いている。それでミーツイングの時に僕が「ドラムやりたい」って言うとうしたら、野球部のキャッチャーやっていた奴が「ドラムは俺がやる」って言ったから、全員納得して「いやーお前じゃないよ！」って。「あーそうやなあ。」(笑)。残ったのがベースだったんですよ。

ロックバンドはドラムがカッコイイところが好き。クラシックとは違う要素じゃないですか。リズムがカッコイイから好きになって、だからドラムのカッコイイ曲を選んで聴いていました。ロックってのは自分にとってはそこが凄く大事な要素だった。元々、両親がクラシックのミュージシャンなんです。「労音」ってあるじゃないですか。「勤労者音楽協議会」っていうから「労音」。その松山の労音で親父はリーダー格として活動していたね。お袋とはそこで知り合って結婚したんです。それで3歳からピアノを習わせられていたんですよ。親は英才教育のつもりだったんですけど、嫌いだっただんですよ、ピアノ。いろいろ理由があったね。まず、譜面のシステムが全く理解できなかった。何故こんなことして音楽を伝えようとしているのかって納得がいかなくて。それで説明できないことがあるはずだみたいな。これを読んでその通りに弾けって言われることに凄く違和感を感じていて、一切譜面のことを勉強する気ななかったんですよ。自分があとで曲作れるようになって譜面は書かないって言うか書けない。あと、ピアノが

嫌いだった理由は、男の子なのにピアノのお稽古に通っている。近所の子からしたら「なんだありゃ」「みんな野球やっとなのに何処行くんだよ」みたいな疎外感があった。コンプレックスがあったんですよ。それで小学生の時とか友達に「僕は音楽が嫌いなんだ」とか言っていたんですよ。「嫌いなんだけどできるんだよ」ぐらいの言い方していたんですよ。で、クラスの歌を作ろうというのがあったね。絶対、僕、それを作っていた人なんです。ピアノをやっているからってことではなく、そういうのは僕に任せとけぐらいの勢いでやっちゃっていたんですよ。「僕に任せとけ」「僕がやってやる」とか言ってる。ちょっと屈折しているんですよ。

それでラジオから流れてくるロックっていうのに惹かれたんです。クラシックばかり勉強させられてたから。当時、親父のレコードってのが家にあって。クラシックもあるけどポップスもあって。適当に出して聴いていたんですよ。井上陽水がありましたね。あと、「AKIRA」っていう映画あったじゃない。あれの音楽作った「芸能山城組」のもっと前のレコード「恐山」っていうのをよく聴いていてね。なんで聴いていたかっていうと、ドラムが入っていてロックっぽい。「エレキギターが入っているぞ」とかね。あと、隣の家に2歳くらい歳上のお姉さんが住んでいて、そのお姉さんの部屋からユーミンの「あの日に帰りたい」のシングルが延々かかっているのが聞こえてきて、それが凄く好きになって壁に耳を当てて聴いていたことがあります。それが自分から音楽を好

きになった最初の記憶です。

今、レコーディングのプロジェクトばかりやっていてレコード会社を作りたんですよ。それは確実に形になってきている気がする。どういうレコード会社かかっていうと、シカゴのチェスやデトロイトのモータウンみたいな場所ありきの、スタジオありきの自主運営レコーディングスタジオ、自主運営レコードレーベルにしたいんです。Annie's Cafe は、音響的に理想的な構造をしています。設計士の人は間違いなくレコーディングスタジオを作ること意識して設計しています。でもね、レコーディングスタジオとしては使われてなかったんですよ。最初は他の方が立ち上げたんですけどね。経営が悪くて潰れたみたい。今の店長は不動産屋さんに紹介してもらって面白い所あるなって借りたんですけど。初めはカラオケの装置とか置かれていて全然機能してなくて、こんな良い場所なのに何やってるんだみたいな感じでね。それで店長がPAの機材とか入れてライブができるようにやっていたらしいんですけどね。それこそ、ジョニー大倉とか近藤等則とか、あの辺ライブ呼んでやっていたらしいんですけどスタックがいなくなっちゃったみたいだね。それで呼ばれたんですよ。ここでPAとブックオフやたらいんじゃないかって。良い場所だからって紹介されて見に来た時に「あっ、これはライブハウスというより、スタジオ」って。僕、ライブ演奏をマイク一本で録る録り方をずっとずっと前から研究していて、結論はそこにあったんですよ。マイク一本でライブを録ったら良いレコーディングが

できるっていうのは理論的にはあったんですよ。本当に録音の研究ばかりしていたんですよ。小学校の5年ぐらいの時に「おばあちゃんにカセットテープレコーダーをもらったのがきっかけで、ラジオから流れてくる「エルヴィスプレスリー」とか「ザ・ビートルズ」の音楽と自分が今録音した唄と何が違うんだって思ったところから自分の創作が始まっているんです。最初に自分の声を録るじゃないですか。テープレコーダーのボタンをカチヤッって押して喋って「さあ、聞いてみよう」って巻き戻して聴くじゃないですか。もうその行為が「あっ、これタイムマシンやん」と思ったんですよ。さっきのことが再生できるんだみたいな。でも聴いたら「あれ？これ僕の声ちゃうやん」と思ったその時に、タイムマシンやっと思ってたんですけど、僕の声じゃない。こんなはずではないみたい。自分の声やっと思ってたかったんやけど、自分の声でない。全然違うな。そこからタイムマシン持っていてあの時に帰れるねん」みたいな感じ。でもテープも高価なものやしパンパン使えない。もうちょっと身になることがしたいな。次に録ったのはラジオから流れてくる音楽。ラジオ聴くようになって、とにかく洋楽が聴きたくしようがない。「もう日本の歌謡曲くだけない」「どうもこいつも、ほんまにしょうもない奴ばっかりや」って本気で思ってたんですよ。クラスのみんなが学校で流行りの歌謡曲がどうしたこうしたとか全然面白く無かった。でも洋楽を聴くようになって「ウォー！これカッコイイ」ってのがザクザク出てくるんですよ。それを昔はラジオカセなんてもんなかったから、ラジオつけると好きな曲が流れ

WILD STYLE

Wild Style

生きてるだけでファンキー
歩いているのが超クール
あとは始めるだけ
腰を振ってごらん

we are all graffiti artist

地下鉄を塗りたくるのさ
窓があるのに外は塵だらけの
この地下鉄を
WILD STYLEは僕らのヴィジョン
新しいやり方で
思うまま塗り替えちまおう
世界中の壁を

生きてるだけでファンキー
歩いているのが超クール
あとは始めるだけ
腰を振ってごらん

今日はあぶない雨降りだから
一日地下鉄の中で
昔使ったチケット握って
改札かけぬけていく

窓があるのにそとは塵だらけ
落書きをしよう
今日はあぶない雨降り

words and music by Yow Morishima

たら、テープレコーダー横に置いて録る。繋いでなくて、スピーカーから出ている音をそのまま録る。昔はね、NHK FMしかなかったんですけど、夕方にまるまる1時間LP全部かけてくれる番組があったんですよ。僕なんかレコード買えないから、とにかくその番組を無差別に録る。全部録るんです。それを1週間聴いて好きだったら残すし、嫌いだったら次に上書きしてね。そうやって自分が好きな音楽がたまっていって、特に夢中になったのが、レッド・ツェッペリンだったんですよ。

高校2年の時のクラスメイトに電気屋の息子がいて家に電気製品がいろいろあって、アナログ・シンセサイザーを持っていたんですよ。[Roland SH-2]ってやつ。それ貸してやるって言ってますよ。このシンセサイザーっていう楽器があったら世の中の音は理論的にはどんな音でも出せる。そういう機械なんだって言われて。いたく感動して「分かった！ちょっと貸して」って家に帰っていきつてみるとフィルタとか面白いですよ。もう遊んでいるのが面白すぎるから、テープレコーダーのスイッチをカチャって押して録音したんですよ。もういいかっていうぐらい録って、今度聴いたんですよ。それ聴きながら他の音とか一緒にこっちでまた音出して。そしたら「これ面白いなあ」って「これをもう1回録ろう」って止まらなくなって(笑)。それで昔ね、マイクミキシング機能って付いていたんですよ。カラオケマイクみたいなものをラジカセに放り込むところがあって、そこに突っ込んだら混ぜられるって気が付いて、混ぜたやつをもう一台のテープレ

コーダーで録音するんですよ。そしたら混ぜたやつをまた録音して、それ聴きながらまた混ぜた。4、5回ぐらい混ぜて40分ぐらいのものを作ったんですよ。その時に、これ歌が入ったら面白いかなとギンギラギンで寝ずにやっています。親には内緒でコソコソ夜中に布団の中で「ウェー」って声とか出したりして止まらなくなって(笑)。

多重録音が解ってきたからシンセでドラムの音から作るうって、バスターミタいな音だけ「ダン、ダンダン」とかやって。次はスネアって。ずっと重ね続けて。

一首ずつ作らなアカンから。今なんか何の苦労もなくできてしまうけど、当時はまず音を作る所から。どういう音がいいかって。高校生の時それやっていて。ほんとで大学に行ったらオーブリーールのマルチトラックをかうって決めていたんですよ。それで録音絶対やるうって思っています。実際、買ったんですよ。京都来て大学入った時にローン組んで、バンドも同時にやっていた。バンドがやりたくて仕方なくて。松山でバンドはできないと思っていたんですよ。なんでかって、中学生の時のバンドは音楽になっていないのはもう明白っていうか、カッコつけているだけ、全員(笑)。しかも女の子が見学に来るから盛り上がっているわけよ、勝手に(笑)。それで人前でもやるとねん。全校生徒集めて3年生を送る会。自分が3年生やのに勝手にコンサートねじ込んでやっちゃったんですよ体育館で。しかも何にもないやん、PAとかも。ドラムは野球部のキャッチャーやった奴が買いたって。もうそれだけで盛り上がって。それまでドラムセット見たことなかった

から、俺ら。そんなレベル、当時は。本当にね、全校生徒の前でやっちゃったんやけど。しかもね「ディー・パープル」とかやってたんやけど、「ディー・パープルはやっぱりキツイやろう」「みんなの前でやったらアカンちゃうの」とか言っていた。だいぶ寄せて「いとしのエリー」(笑)。「いとしのエリー」のコピーしたつもりやけど、校長先生とかが耳を塞いでいたのを、僕はステージの上から見たもん(笑)。もうそんな内容やったらやと思う。全員ボカーンみたいな、「あーやっちゃった...。ヤッちゃってるなあ...」(笑)。もうひどいなあと思っていた。うん。でもね、メンバーは盛り上がっていた。とにかくみんなの前でやった事実

に盛り上がって、やり切った感じがあって。しかも下級生の女の子から手紙が来たとか。田舎やからね、刺激的に見えたんやろうね。それが中学校3年で、高校入ったんやけど、みんなバラバラの高校だったけど、「またやろうーやるでー！これからやるやで！」みたいな感じで。ペーリストやったら握力鍛えなアカンから、ハンドグリップみたいなやつ持ってきて「これで練習するんや」とか言われて。でも「僕、もうそんなのいいから」「もう辞める」って辞めしてしまったんですよ。あとは多重録音だけ。バンドは見に行っていましたよ。一緒にやっていた連中がもつと上手くなって市民会館借りて自主コンサートやっていたんで。結構、今思えばちゃんとやっていたような気がする。でも、僕は「やっぱ寒いなあ」と、もう嫌やってん。「もう、ここでは駄目だ。これが精一杯なんや」「早くバンドが出来る街に行きたい」「どこに行ったらバンドができるか」ってずっと考えていたんですよ。それでちょうどNHKの

FMで「全国ライブハウスツアー」という特別番組があって、全国のライブハウスでライブやっているバンドの中継みたいな、録音したやつを1時間番組にして五日間連続で放送したんですよ。それ聴いていたんですよ。札幌が「安全地帯」。デビューする前。ハードロックバンドやっつてん。東京はちょっと名前忘れたけど、刺とチャライビートバンドみたいな「俺たちはアィドルじゃないんだ！」「キヤー！」みたいな(笑)。そのシーンだけ覚えてる。「あーしょうもない」と思ってた。博多が「ロックス」。陣内孝則。まあまあマンな方かなと思っていたんやけど、それでもちょっと田舎臭いなあと思つたんですよ。で、京都が「森森...」

「たたく」で「憂歌団」。結構、衝撃やっつて。知らなかったから。ブルースなんて全然知らなかったし。京都でブルースが流行っているのも知らなかった。でもパンクバンドに聞こえたんだよね。アコースティックだけどもちゃくちゃカッコーやった。弦が切れたいうて弦張り替えている間にトイレに駆け込むみたいな。なんかパンクッシュな感じ。社会風刺的な歌もあるし。酒蔵でロックやってるんや！バンドやるんだしたら京都に行くんだって決めた、高3の時にね。それで京都来てすぐバンド入ったんや。それもドラムに入れるバンドに。浪人で来るとるのにすぐにワタナベ楽器に行つて。ドラム募集の張り紙がいっぱいあるねん。ドラムは人手が足りてないから多いんですよ。分かってたから、目についたちょっとセンスが合いそうなフライヤーを2、3個ピックアップして電話して、最初に繋がって入ったのが「パイオレンス」っていうパンクバンド。京大西部講堂とか教えてもらって。ピートクレイジーって

うパンクのコミュニティがあった、西部講堂を中心にやっていたんですよ。その隣にあった「ロック・ア・ゴー・ゴー」っていう掘っ立て小屋で初ライブ。ハードコアパンクばかり。パンクがあるって知らなかったん、京都に。

バンドやっている奴なら日本最初のライブハウス拾得に出たくて仕方がない。出られたんですけどね。一回出て自分のレベルが低いのに衝撃を受けました。店主のテリーさんにも「これじゃ駄目だね」って。あまりの落差にショックを受けました。「こりゃ駄目だ。練習しないと駄目だ」って。もう一人ロックンロールギター弾ける奴を入れて「ロールバックス」ってバンド名に変えてね。「巻き返し」って(笑)。で、とにかく週に3回練習やっていたんですよ。もう拾得に出たくて「次出して下さい！」って言うても「いやー。あれじゃちょっとね」とか言われる。それで悔しいから買ったオーブリーールの4トラックを使って録音したんですよ。まだどうやって録らないんだけど、とにかくその時なりにベストを尽くしてデモテープにして持って行つたんですよ。でも何回も落とされて。「いやー。うちでは駄目ですわね」とか「ドラムがちょっとね」って。「くっそー」って(笑)。ほんとで後にテリーさんと喋っていたら「森島君ほどデモテープを次から次に持ってくる人はいなかったね」って。落とされるから「録るぞ！また録るぞー」って録りまくったからね。でも半年後ぐらいには月一で出られるようになった。その半年後ぐらいには拾得でバイトもできるようになって。パ

イトもね、3回断られたけど(笑)。それが大学の3年生ぐらいかな。そこからどっぷり拾得に入りましたね。いろんな人を見たね。ほんと全国津々浦々、僕人いっぱいおっかし。拾得も手作りなんですよ。酒蔵を改造して、仲間が集まって大工仕事して、そうやって自分らで自分の場所を作るっていう姿勢があるんやね。やるんやったら場所から作るうって。本気でやってる人が集まっているっていう意味なんや。Annie's Cafeだって同じ気持ちでやってる。僕はAnnie's Cafeを西部講堂みたいな自主管理空間にしたいと思って始めたんです。今でもその気持ちはあります。あと、アニメでレコーディングしたら音が凄くいいから、レコード作りたい人が自分らで作って、自分でレコード会社作つたらいいやんっていう気持ちがあるんや。

ロールバックスでドラムを叩いていたけどボーカルの奴に自分の曲を歌ってもらった感じがちょっと嫌だなって言うか、思う感じになってない。バンドって各人のテンションで変わるじゃないですか、ノリが。それで自分のバンドを作るって辞めて「BAD STUFF」を作ったんです。5年ぐらいやったかな。CDを2枚作って、自分らで全部録音もやって遂にやり出した。オープンリールの4トラックをバンドの録音にやっと思う時がきた。大学も卒業したし「さあ、ここからやるよ」ってやっていったんですけど、メンバリーが結婚とか出産とかでバンド休止しちゃうんですよ。で、そんな時、僕がCDリリースしたレーベルのオーナーから「今度、ローザ・ルクセンブルグ、ボ・

自分の子供がおっぱい飲んでるのを見て、お母さんと子供が満たされている状態とかに凄く説得力があって「あっ、僕にはこれが欠けていたんだ」って、その時分かったんです。自分が子供の頃から内面に抱え込んでいた得体の知れない不快感の正体が。それで母乳狂信者みたいになって「僕は粉ミルクで育ったけど、それがどんなに辛かったと思うとるねん」と親をなじったんですよ。そしたら母親が「でも私は汚染されている」とボソッと言うんですよ。私は汚染されていたから、あなたにはあげられなかったみたいな感じ。言わへん、それ以上なんにも。

僕は高校生の時は夜中にラジオばかり聴いていた。ある夜、親父が怒って「お前ラジオばかり聴いて勉強もせんと何をしとるのじゃ」ってケンカになった事があるんですよ。当時、伊方原発が愛媛県にできる、できひんって、報道で反対派、賛成派の闘争があつた。僕は親父が新聞社に勤めていたので、「このままほっといたら原発ができてしまうやん。なんで黙ってんの？お父さん、新聞社やろーあかんって言わないの！なんで言わへんの！」って言うたことあるんですよ。辛かったよなって、今思えますね。痛いところ突いてもうたかもしれない。僕なんか今、電気使わん方がええとか、「エネルギーカルマ理論」とか書いてるけど、電気充分使っていますやんか。電気使ってエレキバンドやっていて、田舎引込んで自給自足の生活している方がよっぽど男らしいかもしれないとも思うんですよ。僕はそれはしたくないんです。都市生活者になって奴隷でも何でも

ガンボスでベース弾いていた永井利充という奴のソノアルバムを作るんだけど「一緒にやらんか」って言われて「あっ、面白そう」と思ってた。うちのスタジオに来てもらって一緒に音出ししたりして盛り上がり、これ書いてない名コンビだなとかと思っちゃって。BAD STUFF休止していたから、そのまんま永井君と一緒にバンド作るうってなつた。永井君もボ・ガンボス解散したところだったから「俺はもう自分のバンドでやるんや」「一緒にやるうぜ」って「Dr.TOSH & LOVE」ってバンド始めたんです。それがだいたい95年の阪神大震災ぐらいから始まって2000年まで続くんですよ。最初凄く面白かったんですけどね。

バンド作ろうってなつた。ファンカデリックっていうか、大所帯のファンカバンドみたいな。東京の「CLUB ONE」とかで毎月ワンマンやって演員で盛り上がりまくっていたんですよ。メジャー関係の人から連絡がきて、面白いからお金も出してあげるし、レコーディングしないかって。一か月スタジオロックアウトとかでさせてもらっていたんだけど、だんだん面白くなつてきて。結局、自分で作った歌を自分で歌ってなかったことが原因だと思ふんです。最後、ひどかったですよ。鬱病みたいになってプレーが駄目になっていったんですよ。ドラム叩いてたけど楽しくない。実際、出ている音が良くなかった。迷惑かけているなど、みんなに。もう怖くて音が出せないんですよ。ドラム叩けなくなつて、簡単なこともできない。どうなつちやっただろうかって、自分でもわかんないぐらい失意のどん底やった。その時にサナエ(森島さんの奥さん。「ADX」のメンバー)に出会ったんですよ。たまたま安田荘に

いいから、そこでロックンロールスターにならなあかんと思ってるんです。そのために僕は松山を出てここに来たんですよ。もうそりや本当にそのつもりで来たんだ。だから「電気使つたらあかん」って実際そう思っている、本当にカッコイイもんで何やろうって思つた時に、電気ちよつとだけパッチリええ感じで使っている奴が一番カッコイイ気がするんですよ。録音も一緒なんです。全部その美意識。自然界でもエゴはある。エゴを否定しないで、僕、エゴあるんだと思ひますよ。自然界でバラにトゲが生えているとか、ツタが伸びていって他の植物に巻き付くとか、全部それ自然界のエゴですよ。それは言い方を変えると本能とか生存欲みたいなもんかな。それ言うたら当たり前で、それを持っているから、僕らはここで生きているって意味じゃないですか。ただ、電気エネルギー、カルマエネルギーによってエゴが必要以上に増大して、それがしょうもないねんって言いたいんですよ。なんでこんな

ダサいねん。田舎臭いねん。街でカッコイイもんやりたい、ほんまにカッコイイ音楽やりたいねんと思つて田舎から出て来たのに、カッコ良くないパターンが多い。だからやっているんですけどね。自分でやるしかない。もう自分で作っていくしかない。ムーブメントも自分で作つて世の中も変えて行くしかない。変わった後で電気止めてくれたらいいわと思つて。「お前、電気無くなつた世の中の方がええって言うているけど、矛盾しているやんけ」って言われるけど、矛盾しているんですよ。矛盾しているんですけどやっっているんですよ。「足るを知る」と言う古い言い方になるけど、それ凄い重要な事だと思ひます。

遊びに行った時に、安田荘ってミュージシャンの巣窟みたいな、部屋も開けっ広げで普通のアパートとちよつと違うんですよ。誰でも勝手に出入りして、朝から晩まで音楽やっている奴ばつかりの集まりみたいなところ。そこにサナエが住んでいて。彼女の部屋に行った時にギター弾いて歌ってたんですよ。それなら横で「パチカ」っていう楽器を、当時彼女がやりだしたらしくって。僕はあんまりよく知らなかつたんですけど、ギター弾いて歌っていたら、横でシャシャシャって、それがめちゃくちゃ良かったんですよ。グルーヴ、ノリが凄く合っていたんですよ。永井君と一緒にやっていた時にも「こんなにグッドシリ絡みあえる人は、人生の中でそう会えないかもしれない」くらい

の気持ちやっただけど、サナエのピート感はその以上。もう、びっくりして。それですく引越して来たんですよ。安田荘に。決めた。一緒に住むっていうか隣同士の部屋だったんですけどね。壁がコンパネ一枚なので壁越しに普通に会話ができるんですよ。まあ、二部屋借りて一緒に生活しているみたいな。僕が一緒にバンドやるうって「ADX」って名前前で一緒にやりだしたんですよ。とにかくライブばかり。路上でもやっ。路上で歌って投げ銭で何とかならないもんかみたいな。何とかならないかっていうか、もう他にやることがないからやっていたみたいなとこありますよ。冬で寒いのに7時間とか座って路頭に迷つたビビッド夫婦状態になつちやっ。それでたまたま知り合いのラーメン屋さんが「やきめし弁当」っていうのを売出すから売り子にならないかと。それまで音楽で飯食おうと仕事しないようにしていたんですよ。全然仕事してなくて金が全く無

いから、そこでロックンロールスターにならなあかんと思ってるんです。そのために僕は松山を出てここに来たんですよ。もうそりや本当にそのつもりで来たんだ。だから「電気使つたらあかん」って実際そう思っている、本当にカッコイイもんで何やろうって思つた時に、電気ちよつとだけパッチリええ感じで使っている奴が一番カッコイイ気がするんですよ。録音も一緒なんです。全部その美意識。自然界でもエゴはある。エゴを否定しないで、僕、エゴあるんだと思ひますよ。自然界でバラにトゲが生えているとか、ツタが伸びていって他の植物に巻き付くとか、全部それ自然界のエゴですよ。それは言い方を変えると本能とか生存欲みたいなもんかな。それ言うたら当たり前で、それを持っているから、僕らはここで生きているって意味じゃないですか。ただ、電気エネルギー、カルマエネルギーによってエゴが必要以上に増大して、それがしょうもないねんって言いたいんですよ。なんでこんな

ダサいねん。田舎臭いねん。街でカッコイイもんやりたい、ほんまにカッコイイ音楽やりたいねんと思つて田舎から出て来たのに、カッコ良くないパターンが多い。だからやっているんですけどね。自分でやるしかない。もう自分で作っていくしかない。ムーブメントも自分で作つて世の中も変えて行くしかない。変わった後で電気止めてくれたらいいわと思つて。「お前、電気無くなつた世の中の方がええって言うているけど、矛盾しているやんけ」って言われるけど、矛盾しているんですよ。矛盾しているんですけどやっっているんですよ。「足るを知る」と言う古い言い方になるけど、それ凄い重要な事だと思ひます。

かつたんで「やるやる。お金ないし。やらせてもらいます」ってやり出したんですよ。最初、鳥丸通りのオフィス街で15個しか売れない。やきめしに、ゆで卵、キムチ、紅生姜、あとスープがついたんですけど、美味しいかもしれないけど、毎日キツイやろって。それで筆ペンで新聞書いて包み紙にしたらどうだろうって。最初はこの弁当はこうやって食うと美味いって「ゆで卵をバラバラにスプーンで砕いて食うんだ」とか新しい食べ方書いたりしてね。それが「やきめし新聞」の始まり。割とその読みは当たってリピーターが増えて人気が出てきたんですよ。最終的には焼くのもやっつて日に150個ぐらい売れていましたよ。その店で出前用のバイクで売りに行っていたんだけど、おまわりさんが来て駐禁取られたりするので、リヤカーを見つけてきてね。それもサイドカーになっているリヤカーあるでしょう。それでやったらインパクトが強く取材も何個か受けましたよ。でも向かいのカフェとかには目の敵にされていましたね。物売りの歌ってあるじゃない。ああいうのを自分で作ってでかい声で唸っていたんで。それがまた話題になっていったみたいだね。やきめし弁当を作った、新聞も書いていた。しただけど、音楽をやるためにやっていた。そのために生きてるところありますね。なんでか知らないけど他にないです。できないうです。それは昔から言っていました。

僕、被爆二世なんです。それも、未公認の潜在的な意味での。松山って瀬戸内海峡んで広島の前線にある街で、うちの母親は幼少時代、原爆が落ちたその日、初めて、ああ、俺は親に甘えてたんだなって気がついた。小さい頃に死にかけて九死に一生を得たような人生だったから、親にしてみれば生きてるだけで良かったみたいな気持ちで甘やかしてくれてたんだ。大学まで行かせてもらって卒業したけど就職する気もさらさらなくて、バイトしながらバンドをやっているわけです。親父が「もう俺も長くないから、いっ加減に結論出した方がいいんじゃないか」っていきなり電話してきてね。僕は「いや、結論出てるやないか。俺はこれやりたからやっっているんやで」って言うんやけど、「ちゃんと就職して、音楽は趣味でやれ」って。学校の先生になれとか、公務員になつたら老後は安定しているとかね。まあ、皆言っやないですか。世代なんかなあと思う。昭和13年生まれ。だから小学生ぐらいの時に終戦を迎えたのかな？ 満州なんです。満州育ちっていうか、親父には妹もいたらしいんだけど、その妹もお父さんも満州で亡くなつて。戦争ですね。お母さんと二人で命からがら満州を脱出して、避難船で逃げ帰ってきた体験があるらしいんですよ。その話も、全然してくれなかつたんですよ。聞いたことがなくて。親父は新聞社勤めだったでしょ。それで退職後も時々コラムみたいなのを書いていて、掲載された冊子などを送ってくれるんですよ。その中に「ある日、満州の市民が政府の呼びかけで徴収され電車に乗せられた。フト振り返つたら燃えている。満州が燃えている。火を着て燃やされていた」って。そうやって出てきたって。でもそのコラムを読んだのも3年前ぐらい。それまで聞いたことなかったのか、聞いてるけど素通りしていたのか、自分の中に響いてなかったのか。だから反

省れないといけないことは多々あります(笑)。

でも、その親父から言われたことでひとつだけずつと頭の中に残っている言葉があつて。それは「音楽でメシ食おうと思ふな」っていう言葉。それを聞いた時は「まじめにやっつたらメシぐらい食えて当たり前だろ」と心の中で思つて、ずつとその一言に反抗する気持ちでやっつけてきたんですが、今になってみればずごく含蓄のある言葉だと思ふんです。音楽で身を立てるというのは安売りに日銭を稼ぐのとは違うんだというのをはつきりと伝えてくれたんだ。音楽家として人生をどうやって全うするのか自分の身を挺して僕に教えてくれたんだと思ひます。

(2021年6月、京都にて)

子供ができるまで親の気持ちなんか分かんなかった。自分の子供ができた時に

@yowmorishima
Afro Unite Xtacy

Instagram
Facebook
Twitter

Youtobe
Annie's Cafe

Annie's Cafe
〒612-8401 京都市伏見区深草下川原町51-14
TEL 090-9163-3948 定休日:不定休

FEEL FREE

FEEL FREE



主に、東京で限定的にホストイングされる「Edition」は市井の人々の熱いライブホストリーをお届けしています。あなたのグット刺さるお話を募集しています！また、本紙版と連動した「Edition」公式のインスタグラムや YouTube など WEBコンテンツを公開中です。左記、QRコードよりアクセス下さい。

広告主募集 FRRJBE

フリーペーパー-Editionにて
広告を掲載しませんか？ PAPER
03-5328-1700

Edition

Special thanks



本文中に登場する森島が主宰するレーベル、フナブクレコードから現在4タイトルが発表されています。通販で購入できます。メールにてお問い合わせ下さい。



<CD+ブック>
「エネルギーカルマ理論」
森島映 (AUX)
¥3,300 税込



<CD&冊子>
アニーズカフェ・オムニバスアルバム
「非常事態宣言」
¥3,000 税込



<LP+CD>
「白い太陽の魔法使い」(AUX000)
AUX
sold out



<シングルレコード>
「鐘意」(チョンイー) (AUX0001)
AUX
¥5,000 税込



フナブクレコード
hunab-ku record

E-mail: yomorishima@icloud.com
TEL: 075-721-3948

Powered by



宅配広告社
喜びの共有、橋渡し